





のではなく、逆に、注意欠如多動性障害があると虐待を招き寄せることがあるということも考えるべきではないかと思ひ、従来の医学常識に一石を投じる意味で、くだんの雑誌に寄稿したのです。しかし、あまり読まれる雑誌ではないのでしよう、何の反響もありませんでした。時期尚早だったのかもしれない。

ところで、「発達障害」と「不登校」というトピックも時期を同じくして注目されるようになりました。この組み合わせも、先の国会図書館の検索サービスを使うと、二〇〇二年の文献が初



出のようです。しかし、こちらの文献の急増傾向は「虐待」よりも急激です。いまや児童養護施設は、「虐待」「発達障害」「不登校」の三つ組に取り組まなければならない時代となったようです。心理的な問題についての高い専門知識と経験が必要とされる仕事が児童養護施設に押し寄せている感がします。制度的には情緒障害短期治療施設の領分なのでしょうが、とても数が足りません。やむなくそれを支えているのが児童養護施設でしょうが、情緒障害短期治療施設よりも子どもの生活面での自由度が高い分、職員の負担や求められる努力ははるかに大きいことでしょう。職員の皆様の日々のご苦勞を思うと頭が下がります。皆様の無用なご苦勞を減らすためには、力になる知識を身につけることも必要でしょう。その点でも児童福祉センターを今後ますます上手く活用していただきたいと思っております。



## つばさ太鼓

つばさ太鼓は現在、年に三度ほど演奏依頼があり、子ども達がたくさんの方の前で和太鼓を演奏させて頂いております。子ども達にとっては大変貴重な体験になっており、いつもありがたく思っております。

出演が終わった後はいつも、緊張から解放されたからか、達成感を感じているのか、子どもたちの顔は嬉しそうです。「おばあちゃん手叩いてくれたはった」、「赤ちゃん泣かへんかったな」と、話すこともあり、お客さんの反応を子ども達なりに気にしているようです。

つばさ太鼓では、演奏の上手、下手は無関係です。「太鼓やりたい」、その一言で参加できます。そして、参加した子ども全員が本番の舞台上に上がります。太鼓が足りない時には、他のサークルから借りてくることもあります。不思議なもので、本番にリズムがメチャクチャでも、元気良く叩いていると曲は成り立つし、時には、逆にお客さんに喜んでもらえることさえもあります。客席からは見えませんが、リズム

ムが合わない子に  
向かって、  
近くにいる  
子ども  
が「口パ  
ク」でリ  
ズムを合  
わせよう  
と、助け  
てくれることもあります。



じっと見つめて、見守っている子もいます。決して上手な演奏というわけではないのにお客さんに喜んでいただけているのは、おそらく、上手に叩けない子も受け入れようとする子どもたちの姿が、客席にも伝わっているのではないかと、感じるのが時折あります。

つばさ太鼓は、「上手やった」と褒められることよりも、「元気がいい!」とか「かっこいい!」と褒めて頂くことの方がよくあります。上手にこしたことはありませんが、これからも、子ども達が元気に楽しく太鼓を叩けるような、そして、聴いて下さる方にも喜んで頂けるような、そんなつばさ太鼓でありたいと願っております。